二巻本色葉字類抄の同音字注

二戸　麻砂彦

A Study of Phonetic Glosses in "Irohajiruisyō" edited by two volumes

NITO Masahiko

Abstract

Japanese Dictionaries in Heian period has been inflected by Chinese Dictionaries. These are divided into three classes, Bushu（部首：parts of Kanji), Igi（意義：meanings of Kanji) and Jion（字音：readings of of Kanji) from the point of view about there search systems. These search systems were not fit for Japanese Language. And so, Dictionaries by the use of Iroha（イロハ）search system were composed in late Heian period. "Irohajiruisyō" is one of them. This study analyzes Phonetic Glosses（同音字注）in "Irohajiruisyō" edited by two volumes.

キーワード：色葉字類抄、同音字注、日本漢字音
Key Word : Irohajiruisyō, Phonetic Glosses, Sino-Japanese

0　はじめに
1　同音字注の所在一覧
2　切韻系韻書との対応
3　先行文献としての類聚名義抄
4　和名類聚抄の影響
5　三巻本色葉字類抄への増補改訂
6　おわりに

0　はじめに

本稿では、二巻本色葉字類抄における同音字注(1)を取り上げて、その特徴を日本漢字音史の観点から検討する。同じ字類抄諸本である三巻本色葉字類抄の同音字注については、すでに分析した経緯がある。(2)これを踏まえつつ、色葉字類抄における同音字注の役割を明らかにする。また、色葉字類抄諸本(3)の編纂過程と同音字注との問題についても言及しておきたい。

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科

1　同音字注の所在一覧

平安時代末期に成立した『色葉字類抄』はイロハ引きを特徴とする国語辞書である。近代以降に編纂された国語辞書と同質とはいいがたく、第一にイロハ引きという日本語検索の体裁を採用しながらも、第二として意義分類を併用している。掲出する語が「字」、すなわち「漢字」であることに配慮した方法である。日本語本位の立場から、大きくイロハ分けし、次に漢語の実用的な運用の利便性から意義分類を用いることは、当時における漢文の訓読や作成のあり様を反映している。漢字の移入が始まって以来、正式な文字言語は漢字であるという意識が形成されていたこと、仮名の創始があっても変わってはいない。貴族や僧侶などを中心とした識字層は漢字を使わざるを得ない日常的な現実があり、これに対応できる辞書が必要であったことも想像に難くないと言える。しかし、すべての識字層が高い漢字習熟を達成していたとは認めにくく、意義分類を採用する『篆隷萬象名義』『和名類聚抄』、部首引きの『新撰字鏡』『類聚名義抄』など、相当の漢字知識がなければ利用がおぼつかないものが多かった。そこで、第一音節イロハ引きの日本語検索という手段を導入し、求めようと欲する漢字のおおまかな所在探索を容易にしようとした。この方法ならば、漢字に対する高い習熟を要求はしない。むしろ、漢字習熟の初学者でも、ある程度は使えるような体裁と言える。

色葉字類抄のイロハ引きに分類される語は、すでに定着した漢語や音読み以外に見出しを立てられない語も含まれてはいるが、その多くは掲出漢字の和訓によっている。むしろ、当時常用する基本的な和訓語彙を塊集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択するという方針があった。すなわち「色葉和名」[(4)]という体裁である。ただし、辞書は規範を示すと同時に、実用性の追求という両面を求めていくので、やがて増補改訂となってあらわれる。仮名による和訓以外に、反切注・同音字注・仮名音注も見出されるのは、より実用性の高い漢文の訓読や作成支援という側面であろう。

まず、色葉字類抄の特徴であるイロハ引きの検索体裁と同音字注との関わりを見ておく。二巻本は巻上と巻下とに分けたうえ、さらに上上・上下・下上・下下に細分している。この構成を踏まえて、どこに同音字注があるか、その概数を示しておこう。

【表1】

巻上上		巻上下		巻下上		巻下下	
伊	3	和	2	宇	0	阿	1
呂	0	加	6	井	0	佐	0
波	4	與	0	乃	1	木	3
仁	0	他	1	於	0	由	1
保	2	礼	0	久	2	女	0
邊	2	曽	1	野	0	美	0
度	0	津	1	満	1	師	4
池	0	祢	0	計	0	會	0
利	0	那	0	布	0	飛	1
奴	0	良	0	古	0	毛	0
留	0	無	1	江	0	世	0
遠	0			手	0	洲	0

【表2／1】

01 上上・伊・天象二オ3	04 上上・波・人躰一四オ6	06 上上・波・雑物一六オ2	09 上上・保・雑物二六オ2	12 上下・和・植物一オ8	02 上上・伊・動物三ウ1	05 上上・波・人躰一四ウ3	07 上上・波・員数一七オ5
10 上上・邊・地儀二八ウ6	13 上下・和・人倫一ウ5	03 上上・伊・動物三ウ2	08 上上・保・雑物二五ウ9	11 上上・邊・地儀二八ウ6	14 上下・加・地儀五オ4		

【表2／2】

15　上下・加・動物六ウ9　＊熟語上字	16　上下・加・動物六ウ9　＊熟語下字	17　上下・加・雑物九ウ5	18　上下・加・雑物一〇オ3	19　上下・加・辞字一一オ8	20　上下・他・地儀二二オ9	21　上下・曽・人躰三二ウ9	22　上下・津・人事三七オ2
23　上下・無・地儀五〇オ7	24　下下・乃・動物九ウ4	25　下上・久・地儀一八ウ4	26　下上・久・動物一九ウ3	27　下上・満・人事三一オ9	28　下下・阿・飲食四ウ4	29　下下・阿・雑物五オ1	
＊反切注「之夜反」							

【表2／3】

30 下下・木・植物一八オ1	31 下下・木・植物一八オ3	32 下下・木・動物一八オ6		
33 下下・由・雑物二三ウ5	34 下下・師・天象三二ウ3	35 下下・師・天象三二ウ3		
36 下下・師・雑物三五ウ5	37 下下・師・雑物三五ウ1	38 下下・飛・飲食四五ウ6		

巻上上11例、巻上下12例、巻下上4例、巻下下9例、全36例を数える。イロハ引きの検索体裁と同音字注との間に、相関的な因果関係は見つからない。やや「加」部の6例が目立つ程度で、イロハ四十七部に散っている。概数を示した［表1］を確認するため、次に同音字注の所在と付載状況を［表2／1］［表2／2］［表2／3］に一覧してまとめた。なお、番号が〈38〉まであり、全36例を示す［表1］と異なっているが、これは、同音字注の表音形式「云某（音某）」を採りながらも、実際には義注や反切注と認定できる2例〈14〉〈28〉を含むためである。誤認なきよう掲出はしておいた。個々の分析は次章以降において示したい。

【表３】

	被注字（韻目／反切）	注字（韻目／反切）		被注字（韻目／反切）	注字（韻目／反切）		被注字（韻目／反切）	注字（韻目／反切）
1	今（侵韻／居吟切）	★金（侵韻／居吟切）	14	衙（麻韻／五加切）	＊義注の疑い有り。	27	允（準韻／余準切）	★尹（準韻／余準切）
2	嗶（豪韻／胡刀切）	★豪（豪韻／胡刀切）	15	蝌（戈韻／苦禾切）	★科（戈韻／苦禾切）	28	炙（禡韻／之夜切）	＊反切注の誤認
3	鰗（脂韻／以脂切）	◇夷（脂韻／以脂切）	16	蚪（厚韻／當口切）	★斗（厚韻／當口切）	29	紋（文韻／無分切）	★文（文韻／無分切）
4	齗（欣韻／語斤切）	銀（真韻／語巾切）	17	鈇（虞韻／甫無切）	◇扶（虞韻／甫無切）	30	黍（語韻／舒呂切）	★暑（語韻／舒呂切）
5	誌（志韻／職吏切）	★志（志韻／職吏切）	18	蓬（東韻／薄紅切）	逢（鍾韻／符容切）	31	丱＋奕（獮韻／而兗切）	★軟（獮韻／而兗切）
6	礻＋离（支韻／呂支切）	★離（支韻／呂支切）	19	歟（魚韻／以諸切）	★余（魚韻／以諸切）	32	翬（微韻／許歸切）	☆輝（微韻／許歸切）
7	廿（緝韻／人執切）	★入（緝韻／人執切）	20	椽（仙韻／直攣切）	◆傳（仙韻／直攣切）	33	弨（麌韻／芳武切）	★撫（麌韻／芳武切）
8	矛（尤韻／莫浮切）	★謀（尤韻／莫浮切）	21	胰（脂韻／以脂切）	◇夷（脂韻／以脂切）	34	宿（宥韻／息救切）	★秀（宥韻／息救切）
9	缶（有韻／方九切）	◆不（有韻／方九切）	22	辜（模韻／古胡切）	★孤（模韻／古胡切）	35	宿（屋韻／息逐切）	◇夙（屋韻／息逐切）
10	罘（尤韻／縛謀切）	★浮（尤韻／縛謀切）	23	厩（宥韻／居祐切）	★救（宥韻／居祐切）	36	徽（微韻／許歸切）	☆輝（微韻／許歸切）
11	罒＋思（之韻／息茲切）	★思（之韻／息茲切）	24	鯁（耿韻／古幸切）	★耿（耿韻／古幸切）	37	屜（怗韻／蘇協切）	★燮（怗韻／蘇協切）
12	稑（屋韻／力竹切）	★六（屋韻／力竹切）	25	窻（江韻／楚江切）	忿（東韻／倉紅切）	38	釐（之韻／里之切）	◆亻＋來（之韻／里之切）
13	童（東韻／徒紅切）	東（東韻／徳紅切）	26	鵞（陽韻／巨王切）	★狂（陽韻／巨王切）			

【校異と訂正】

03　被注字／魚＋追↓鰗　　09　注　字／尓↓不

21　被注字／貝＋夷↓胰　　22　注　字／歹＋爪↓弧

38　注　字／亻＋彖↓亻＋來

2　切韻系韻書との対応

同音字注は類音表記とも呼ばれるごとく、被注字と同音の一字をもって、その音を示そうとする方法である。中国語音としての漢字音を把握する立場から見れば、同音の漢字を探す場合、同音諸字がグループ化されている韻書を利用すること、これはすぐに思いつく手段であろう。また、被注字に比して注字は常用されている漢字を選択する方が望ましい。韻書における同音グループを代表する字、すなわち小韻代表字は当該条件を満たすことが多いと言える。そこで、色葉字類抄の同音字注や反切注に対応するだろうと想定される当時の中国語音として、切韻系韻書[5]（『広韻』をもって代表する）との対応を調べてみた。これを［表3］[6]に掲げる。なお、切韻系韻書に掲載する反切注を帰納的に分析することで、中国語音韻史上の中古音（Ancient Chinese）の体系[7]を得られる。隋・六朝時代における標準的な音体系と考えられている。

集約した［表3］の中、義注あるいは反切注と推察される〈14〉〈28〉の二例を除く三六例について、二巻本色葉字類抄における同音字注と広韻との対応関係を見れば、その中の三二例が同音把握をしていると認められる。いわゆる中古音的同音ということになるが、編纂者が実際にそれぞれの中国語音を正確に把握し理解できていたのかどうか、そこまでは詳らかではない。広韻あるいはそれに類する他の切韻系韻書を座右に置きつつ、目視だけで確認することも可能と言えるからである。しかも、三二例どころか、当該の全三六例すべてについて、切韻系韻書から引用した方が簡単なことは自明の理である。そこで、同音と判断した状況を詳細に見ておく必要があると思われる。

すでに述べたように、韻書を使って同音字注を選択するならば、同音の小韻代表字をもってするのが適切である。切韻系韻書と同音の把握をした三二例の中、二三例は小韻代表字を選んでいる。［表3］において、★を付けた同音字注が該当する。加えて、☆を付した〈32〉〈36〉は、広韻の小韻代表字は「揮」であるが、他の切韻系韻書『切二』『切三』『王一』では「輝」を小韻代表字としている。宋代に大幅な増補改訂をした広韻は、搭載する漢字の増加にともない、それ以前の切韻系韻書と異なる小韻代表字に変更する場合が見られる。いずれにせよ、この二例を加えた二五例は中古音的同音の把握をした同音字注と言える。同音である小韻の状況を数例掲げておこう。〈02〉〈05〉〈32〉〈36〉の諸例に対応する切韻系韻書である。反切注以外の割注は省略した。

［小韻代表字］		［小韻所属字］	
豪	胡刀反五	號 毫 嗥 濠	（切三）
豪	胡刀反十六	濠 壕 山＋豪 跑 號 毫 嗥	…（刊）
豪	胡刀反十一	號 毫 嗥 濠 嶠	…（王一）
豪	胡刀反十	號 毫 嗥 濠 敖＋力 嶠	…（王二）
豪	胡刀切十三	號 毫 嗥 犭＋皐 濠 壕	…（広韻）
志	之吏反四	女＋志 廾＋志 誌	（王一）
志	之吏反四	女＋志 廾＋志 誌	（王二）
志	職吏切七	女＋志 廾＋志 誌 痣 織 識	（広韻）
輝	許歸反十	揮 徽 翬 褘	…（切二）
輝	許歸反七	暉 揮 徽 翬 褘	…（切三）
輝	許歸反十	揮 徽 翬 褘	…（王一）
揮	許歸切十三	輝 輝 徽 翬 褘	…（広韻）

中古音的同音ではあるが、被注字そのものが小韻代表字となっている例が見られる。注字に◆を付した〈09〉〈20〉〈38〉の三例である。〈09〉の被注字「缶」は小韻に所属する同音字がもとより少ない。常用されるという判断に立てば、「否」「不」の両字になるが、前者は広韻の割

注「又房被切」とあるように別音 bie²⁽³⁾「ヒ」を想定しやすい。後者にも別音として「又甫鳩甫救二切」が示されているが、これらは声調の違う同音であるから、いずれも日本漢字音では「フ」という理解になる。〈20〉の被注字「椽」には同音の小韻所属字として「傳」があるのみで、これを注字とする他には選択の余地がない。〈38〉については、常用されるとは認めにくい二巻本色葉字類抄の注字「亻+來」に問題がある。確かに、広韻では「釐」を代表字とする同じ小韻所属字として「亻+來」は存在するが、他の切韻系韻書には存在しない。当該部分が一部欠損している王二は、所属字数十四であり、切二や切三の二倍を数える。むしろ広韻の所属字数二十に近いから、あるいは「舟+里」の前に存在していたかもしれない。王二は保留せざるを得ないにしても、やはり「亻+來」は常用的な字とは思えない。広韻には当該字のもとに「亻+來來見楚詞」と割注があるのみである。なお、次章に掲げる［**表4**］を先取りすると、類聚名義抄は比較的簡明な同小韻字「貍」（俗字「狸」）に落ち着いたと見ておきたい。切韻系韻書はいずれも小韻代表字「釐」の次に「貍」を示している。

缶　方久反三　　缶+灬　否（切三）
缶　方久反五　　［*当該箇所の小韻諸字が欠損している］（王一）
缶　方久切八　　缶+灬　否　又房被切　不　又甫鳩甫救二切　…（広韻）
椽　直緣反二　　傳（切二）
椽　直緣反二　　傳（刊）
椽　直緣反二　　傳（王一）
椽　直攣切二　　傳（広韻）
釐　里之反七加二　貍　猫　氂　嫠　…（切二）
釐　里之反七　　貍　似猫　氂　…（切三）
釐　里之反十四　　［*当該箇所の小韻諸字欠損］…　舟+里　…（王二）
釐　里之切二十　　貍　野猫　狸　俗　氂　嫠　…　亻+來　亻+來來見楚詞
　　舟+里　…（広韻）

中古音的同音ではあるが、注字選択に関わる問題として、◇を付けた〈03〉〈17〉〈21〉〈35〉にも注目しなければならない。広韻を含むいずれの切韻系韻書も、〈03〉〈21〉の被注字「鰿」「胰」と同音の小韻代表字は「姨」である。しかし、二巻本色葉字類抄は注字「夷」を選んでいる。女偏が付かない諧声符が簡明という判断をした可能性はある。小韻代表字「跗」ではなく、同小韻内の「扶」を選んだ〈17〉も常用的な字の選択であろう。この例については、類聚名義抄の同音字注も分析に加えて、次章で再度扱う。〈35〉の被注字「宿」に対応する同音の小韻代表字は「肅」である。当該字は画数が多いことも避けられた一因かと推察するが、当該の「宿」には二音あり、宥韻に属する〈34〉の「宿」では広韻の割注に「又音夙」と見える。これを選んだ可能性がある。加えて、注字の「夙」は漢文訓読において副詞「つとに」として常用される語であることが選択の背景に存すると思われる。まさに、色葉字類抄が漢文の訓読や作成に資する目的で編纂されたことを物語っている。

姨　以脂反十二　彝　寅　夷　…　胰　…（切二）
姨　以脂反十一　寅　彝　夷　…（切三）
姨　以脂反十四　彝　寅　夷　…　胰　…（王二）
姨　以脂切二十六　彝　寅　夷　…　胰　鰿　…（広韻）
秀　息救反五　　繡　虫+秀　琇　宿　星　…（王一）
秀　先救反五　　繡　虫+秀　琇　宿　星名又息逐　…（王二）
秀　息救反五加一　繡　虫+秀　琇　宿　星宿亦宿留又音肅加　…（唐）
秀　息救切五　　繡　虫+秀　琇　宿　星宿又宿留又音夙　…（広韻）

肅 息逐反八　宿 蓿 夙 玉 …（切三）
肅 息逐反十二　宿 蓿 夙 玉 …（王二）
肅 息逐反十二　宿 蓿 風+彡 夙 玉 …（王三）
肅 息逐反十二　宿 蓿 夙 玉 …（王三）
肅 息逐切二十三　宿 蓿 夙 玉 …（広韻）

ここまで分析した三二例は、その被注字と注字とが中古音的同音として把握されていることが判明した。では、残った四例〈04〉〈13〉〈18〉〈25〉について、個々の分析を試みよう。

まず、〈04〉の被注字「斷」は欣韻所属字である。同音の小韻代表字は虎聲を意味する「斤+虎」であるが、常用するとは言い難い。同音の小韻所属字には他に適切なものが見当たらないと判断した可能性がある。また、被注字の反切上字「語」からも知られるように、頭子音（いわゆる声母）(9)は疑母ŋ(10)であるから、仮名音注で表せば「ギン」となり、日本語の濁音を表示できる注字の選択に迫られた。同韻字で群母gを有する「勤」は、全濁声母の無声化(11)を反映して、日本漢字音では「キン」である。このような条件があるため、韻目の異なる眞韻にありながらも、近似した字音の把握ができる注字「銀」を選んだと認めたい。

斤+虎 語斤反四　狄 斷 圻 （切三）
斤+虎 語斤切十二　狄 圻 垠 斷 齦 …（広韻）
銀 語巾反八　彳+斤 虎+虎 …（切三）
銀 語巾切十六　彳+斤 彳+言 虎+虎+日 … 垠 …（広韻）

次に〈13〉の被注字「童」は同音の小韻代表字「同」を注字とすることが期待される。これは字音把握の容易な常用字である。しかし、すでに「同」は「ドウ」という日本語の濁音形で定着していたと認められ、これを避けなければならなかった。実際に、観智院本類聚名義抄では「童 徒紅反 和土ウ」（法上九二7）とあり、和音が有声音である濁音を示している。そうなると、日本語の清音「トウ」で把握が可能な注字選択をしなければならない。同じ東韻所属字の中から、「同」の直前にあり、最も近似した「東」を候補としたことが想像される。

正字（あるいは本字）と俗字に関わる問題を反映した例もある。〈25〉は、被注字「窻」（江韻／楚江切）tsʻaunʲ に対して、注字「忿」（東韻／倉紅切）tsʻuŋʲ が付されている。近似した韻母とは言え、同音の把握ではない。ところが、それぞれの小韻グループに注目すると、「囪」を媒介とした同音の理解ができたのではないかと推察される。通孔の意味から「まど」を表す本字「窗」に対して、俗字「窻・窓」別体「牕」がある。この点は『切二』『王二』の割注から確かめられる。そして、牆＝垣根を意味する「囪」は「窻・牕・窓」と同音の小韻代表字である。その一方で、小韻代表字「忽」（俗字「忿」）と同音のグループにも「囪」は存する。さらに、注字の「忿」は被注字「窻」の諧声符読みから付けられた可能性も否定できない。

窓 楚江反二加一按説文作此囪又以穴作此窗 …（切二）
窻 楚江反三 …（切三）
窻 楚江反三加二案窻牖也又窗窻窓牕同 …（王二）
囪 楚江切九　窻 牕 上同 窓 俗 …（広韻）
忿 息紅反八加一　葱 悤 車+忽 聰 総 驄 …（切二）
忿 倉紅反十四　葱 車+忽 聰 総 璁 驄 …（刊）
忿 倉紅反八加四　葱 悤 車+忽 聰 総 璁 驄 …（王二）
忽 倉紅切十五　忿 俗 … 聰 … 囪 竈突 …（広韻）
蓬 薄紅切十　竹+夆 篷 髟+夆 蜂 芃 …（広韻）
逢 符容切八　縫 氵+逢 革+逢 矛+逢 夆 …（広韻）

近似した音ではあるが、〈18〉も被注字「蓬」（東韻／薄紅切）bʌuŋ'と注字「逢」（鍾韻／符容切）biauŋ'との同音把握はできていない。被注字「蓬」が小韻代表字であるため、もともと注字の選択に制限があったのか、同音ではあっても、小韻所属の「竹＋夆・篷・彭＋夆・蜂・芃」などを注字としてはいない。ただし、三巻本色葉字類抄の当該字割注には「カナキ［平上上濁］逢以蓬橦鍾是也」（巻上・加・雑物九九ウ5）とあり、義注の疑いも残る。

【表4】

	被注字	注字	観智院本類聚名義抄		被注字	注字	観智院本類聚名義抄		被注字	注字	観智院本類聚名義抄
1	今	★金	◎金（僧中一4）	14	衙	＊義注	牙（佛上四四3）	27	允	★尹	◎尹（佛下末一六1）
2	嗥	★豪	禾カフ（佛中五二3）	15	蝌	★科	◎科（僧下二〇2）	28	炙	＊反切	又シヤ（佛下末四四3）
3	鰒	◇夷	◎夷（僧下四1）	16	蚪	★斗	◎斗（僧下二〇2）	29	紋	★文	◎文（法中一二〇1）
4	斷	銀		17	鈇	◇扶	○夫（僧上一二三6）	30	黍	★暑	○鼠（法下一九6）
5	誌	★志	◎志（法上五五1）	18	蓬	逢	◎逢（僧上三七1）	31	卅＋奕	★軟	◎軟（僧上四七8）
6	礻＋离	★離	◎離（法中一四六6）	19	歟	★余	◎余（僧中四四6）	32	翬	☆輝	○暉（僧上九九3）
7	廿	★入	◎入（佛上八二5）	20	椽	◆傳	◎傳（佛下本九六3）	33	弭	★撫	◎撫（僧中二六8）
8	矛	★謀	◎謀（僧中三六2）	21	胰	◇夷		34	宿	★秀	
9	缶	◆不	◎不（僧中二二1）	22	辜	★孤	◎孤（僧下六六4）	35	宿	◇夙	禾シク（法下五四6）
10	罘	★浮	◎浮（僧中九3）	23	厩	★救	◎救（法下一〇六2）	36	徽	☆輝	◎輝（佛上三九1）
11	罒＋思	★思	◎思（僧中九4）	24	鯁	★耿	◎耿（僧下六8）	37	屜	★燮	◎燮（法下九一1）
12	稑	★六	◎六（法下一一8）	25	窻	忿	禾ソウ（法下六〇3）	38	釐	◆亻＋來	○貍（僧下一〇六2）
13	童	東	禾土ウ（法上九二7）	26	鵞	★狂	◎狂（僧中一二九8）				

3　先行文献としての類聚名義抄

前章では、二巻本色葉字類抄に見出される同音字注三六例について、同音字注を付載する上での規範となったであろう切韻系韻書との対応関係を分析した。その結果、三二例が中古音的同音の把握をする同音字注と確認できた。残る四例は、中国語音そのものを正確に理解することより、日本語に馴化した漢字音の立場、まさに日本漢字音としての把握を反映していると認められる。このことは、韻書を座右に置いて引用する方法だけではなく、何らかの注字選択に関わる別規範を想定する必要がある。中国由来ではなく、日本側の文献を参照していた可能性も予想できよう。現存する『篆隷万象名義』『新撰字鏡』『和名類聚抄』も候補であろうし、失書・佚文も含めれば、『楊氏漢語抄』『東宮切韻』『李綱切韻』等も視野にはいろう。同音字注を相当数保持し、かつ色葉字類抄と成立年代が近い先行文献を考慮すると、まずは『類聚名義抄』(12)にあたって見るべきではないか。出典を多く掲げる図書寮本が零本であるため、観智院本を用いるが、掲出する漢字によっては同音字注も付けられている場合が多い。おそらくは類聚名義抄の同音字注自体も何らかの先行文献による引用と予想される。その出典が明示されていないこと、まことに残念ではある。先の［表3］をもとに［表4］としてまとめた。二巻本色葉字類抄で同音字注が付けられた被注字に対して、観智院本類聚名義抄における当該の同音字注の状況を加えてある。その表記形式が「亠某（音某）」でるあることは言うまでもない。空白は該当する同音字注がないことを指す。対応する同音字注はないが和音注が存する場合、参考までにこれを掲げた。

観智院本類聚名義抄と対照した結果、◎を付けた二五例について、二巻本色葉字類抄の同音字注と同じ注字選択であることが判明する。〈18〉を除く二四例は、いわゆる中古音的同音で、類聚名義抄の同音字注にも切韻系韻書の影響があることがわかる。被注字「蓬」が小韻代表字である〈18〉については、その注字選択に制限があったため、字音の近似した「逢」を注字としたこと、前章末尾において分析した。類聚名義抄も同じ状況であるが、この選択が同書編纂者の判断であるのか、先行文献の反映であるのか、にわかには判断できない。

次に、○を付した〈17〉〈30〉〈32〉〈38〉三例は同じ小韻内の別字をもって同音字注としている四例である。これも中古音的同音には違いない。確認のため、広韻を含む切韻系韻書の該当小韻を掲出する。なお、〈38〉は前章において分析済みゆえ、重複を避ける。

跗 甫無反十　膚 夫＋阝　鈇 礻＋夫　…　夫（切三）
跗 甫無反十三　膚 夫＋阝　礻＋夫　…　夫　鳩　…（王一）
跗 甫無切二十一　趺 膚 肬 夫＋阝　鈇　…　夫　鳩　柎　扶　…
（広韻）

暑 舒筥反五　鼠 黍 虫＋黍 疒＋鼠（切三）
暑 舒筥反五　鼠 黍 虫＋黍 疒＋鼠（王一）
暑 舒筥反五　鼠 黍 虫＋黍 疒＋鼠（王二）
暑 舒筥切五　鼠 黍 虫＋黍 疒＋鼠（広韻）

輝 許歸反十　揮 徽 翬 褘 山＋衡 暉　…（切二）
輝 許歸反七　暉 揮 徽 翬 褘 山＋衡（切三）
輝 許歸反十　揮 徽 翬 褘 山＋衡［四字不明］（王一）
揮 許歸切十三　煇 輝 暉 徽 翬 褘 山＋衡　…（広韻）

〈17〉における二巻本色葉字類抄の被注字「鈇」は切三と広韻とに見出される。王一に当該字はない。それでも、小韻代表字は「跗」であり、同小韻内の「夫」を同音字注とする類聚名義抄の同音字注選択とは異なる。類聚名義抄は常用的かつ簡潔な諧声符そのものを活用したと判断するべき

であろう。小韻所属字が五例と少ない〈30〉の場合、常用されるとは思えない二字を除いて、小韻代表字「暑」を選ぶこと、二巻本色葉字類抄の注字選択は適切と言える。対して、類聚名義抄が同音字注「鼠」を付載する理由が判然としない。同小韻内では、「黍」「暑」「鼠」の三字が相互に被注字と注字とになり得る限定された環境であったことがわかる。引用もとになった文献の注字選択をそのまま反映している可能性が考えられよう。〈32〉では、二巻本色葉字類抄が広韻以外の切韻系韻書が示す小韻代表字「輝」を同音字注として選んでいるのに対して、類聚名義抄は同小韻内の「暉」を選択している。中古音的同音である点、問題はないが、注字に「輝」を選んでいる〈36〉があり、釈然としない。切二・王一の「輝」には「亦作煇」という注記があり、異体字「煇」と「暉」とを混同したかもしれない。いずれにしても、これら四例が示す注字の選択は、同書編纂者の判断に基づくのか、先行する文献の反映であるのか、すぐには判断しかねる。

ここまで、中古音的同音と認められた類聚名義抄の同音字注は〈18〉を除外した二八例（◎：二四例／○：四例）を数える。しかし、〈02〉〈04〉〈13〉〈21〉〈25〉〈34〉〈35〉の七例に該当する同音字注はない。類聚名義抄で同音字注を付載しない七例中、和音注のある諸例の状況を参考までに掲げる。

嗶　胡刀反　ホユ［平上］イカム　禾カフ［平上］（佛中五二3）
童　徒紅反　ワラハ［平平上］カフロ［平上濁□］禾土ウ（法上九二7）
窻　七江反　クト［平平濁］（法下六五4）
窓　楚江反　マト［平上濁］禾ソウ［□上］（法下六〇3）
宿　ヨル［平上］ヤトル［平平濁上］オク［上平］アラカシメ［上上□□□］息逐反　ムカシ［上上上］ネタリ　モト　アラカシメ　又息救反　禾シク（法下五四6）
星宿　下呉ナ守［平］（法下五四6）

まず〈02〉における二巻本色葉字類抄の注字「豪」は、中古音的同音の同音字注であるとともに、被注字「嗶」が日本語の濁音形「ガウ」となることを想定した選択である。対して、類聚名義抄にある和音注「禾カフ［平上］」を確認すると、声調表示に濁音は付いていない。その逆になるのが〈13〉である。二巻本色葉字類抄の注字「東」は、被注字「童」が濁音ではないことを意識した注字選択と言える。類聚名義抄の和音注「禾土ウ」は日本語の濁音表示「ドウ」を目指している。正字と俗字とが複雑な関係を示すこと、すでに前章で述べた〈25〉の場合、被注字「窻」に対する類聚名義抄の同音字注はない。俗字「窓」には「禾ソウ」（「ウ」に上声点あり、中国語音の末子音が -ŋ（-uŋ）であることを示す「レ」表示を右に添える）が見出せる。なお、「窓」の後には「窻 正 窗 囱 二或」と続くから、別字「囱」を媒介にして字音把握ができたと推測した前章の分析には蓋然性があることを確認できる。二音存する〈34〉〈35〉の被注字「宿」に対して、類聚名義抄に同音字注はない。入声音を表す〈35〉については和音注「禾シク」が存する。続く熟字「星宿」には「下呉ナ守［平］」という注があり、呉音ではあるが、もう一音も把握可能となっている。

このように、和音注があるからと言って、同音字注を付載しない理由とはならない。いずれにせよ、類聚名義抄で同音字注の見出せない七例があることは事実で、二巻本色葉字類抄における同音字注の状況と一致しない部分が存在する。反切注が併載され、編纂者が特に必要と認めなかったのか、出典となった引用文献に同音字注がなかったのか、判然とはしない。反切注と同音字注の機能分担に関わる問題は機会を改めることにする。それにしても、二巻本色葉字類抄と観智院本類聚名義抄とは類似した同音字注付載の状況を示しており、これをどのように解釈すべきであろうか。二つの仮説を示しておきたい。

【A】二巻本色葉字類抄に付載された同音字注は類聚名義抄の同音字注を引用した。

【B】二巻本色葉字類抄に付載された同音字注は切韻系韻書の影響を受けた何らかの先行文献から引用した。

二巻本色葉字類抄で確認できる同音字注三六例の中、二九例は対応する類聚名義抄の同音字注が存在する。その中、二五例は両者一致すること、すでに述べた。一瞥しての高い一致率から、仮説【A】が首肯できるように思われるが、先行文献を座右に置いて引用を試みる場合、単なる書写上の誤認を除いて、ことごとく一致することが期待されよう。両者の注字選択が一致しない四例〈17〉〈30〉〈32〉〈38〉については、合理性のある説明が必要である。すでに前章と本章で、これらに対する個別の分析は試みている。仮説【A】の立場に立てば、〈30〉〈32〉両例は類聚名義抄の注字選択を修正したと考えられる。具体的には、広韻を始めとする切韻系韻書の小韻代表字をもって注字とした。このことは、編纂者に高度な字音の運用知識があり、引用文献たる類聚名義抄の同音字注に修正が必要と認めたことを示している。しかし、この推測に疑問を投げかける〈17〉もある。その注字選択は同音の小韻代表字をもってしたという右のあり方に合致しない。なお、被注字が小韻代表字である〈38〉は、もともと注字の選択に制限がかかる。仮説【A】の蓋然性に傾きながらも、踏み切れない所以である。

そこで、二巻本色葉字類抄と類聚名義抄は各々の同音字注を付載するに際して、同一書とは言えないまでも、引用元を同じくするような先行文献をそれぞれ参照していた可能性が想定できないだろうか。もちろん、切韻系韻書の影響を受けているという条件が加わる。つまりは、仮説【B】である。反切注に比べて、一字をもって注音する同音字注の方が簡潔ではあろうが、被注字の選択において、編纂者に高度な字音の運用知識が要求される。先行文献を参照して、そのまま引用する方が簡便かつ容易である。しかし、ここまでの分析では先行文献を特定できない。わずかに数例であるが、次に示す図書寮本類聚名義抄の出典名を参照すると、同書が多数の先行文献を引用しつつ、同音字注も付載した可能性を指摘できる。類聚名義抄全体に存する同音字注の数に比して、二巻本色葉字類抄のそれは三六例と極めて少ない。果たして、多数の先行文献を引用する意味があったかどうか、疑わしい。仮説【B】を薦めるにしても、単数の先行文献と推測する方がよい。

誌 类云志（去）亠…（八三4）
幼童 音与同、 慈云徒紅反…（一二二4）
紋身 川云音亠文…（三二2）

これらは［表4］の〈05〉〈13〉〈29〉に対応する。出典が明示されている「类云」「川云」の同音字注がその一端を物語る。一見すると「类」は和名類聚抄[13]のごとく思われるが、未だ不明である。「川」が源順の略であり、和名類聚抄を指すことは判明している。次章に掲げるが、被注字「紋」は確かに同書で確認でき、その同音字注「音文」は『考聲切韻』の引用とする。なお、同音字注という意識ではないかと思われる「音与同、」は、被注字「童」に対する注音である。すでに日本語に濁音として定着した「ドウ」を標示しようとする工夫である。観智院本では和音注「禾土ウ」として継承すること、既述した。直後には「慈云徒紅反」があり、この反切注は日本漢字音で清音「トウ」としての把握となろう。「慈」は法相宗の始祖と言われる慈恩大師窺基を指しており、その注疏や音義書（『理趣経疏三巻』『無垢称経疏六巻』『大乗法苑義林章七巻』『妙法華経玄賛十巻』『瑜伽師地論略纂十六刊』等）と考えられる。

図書寮本の数例からではあるが、やはり類聚名義抄は多数の先行文献を引用しつつ同音字注や反切注を付けたと想定できる。さらに、〈05〉〈29〉二例が示す同音字注の選択は、二巻本色葉字類抄と和名類聚抄ともに中古音的同音であり、和名類聚抄の出典「类云」「川云」も切韻系韻書の影響を受けているはずである。ここまでの段階では、先行文献の特定が困難な仮説【B】よりも【A】の可能性に傾く。

4　和名類聚抄の影響

類聚名義抄の他、引用文献として候補に挙がるのは和名類聚抄であろう。二巻本世俗字類抄また二巻本色葉字類抄の増補改編過程において、見出し語たる項目や義注について二十巻本系の和名類聚抄を参照したという指摘がある。(14) 同音字注についても正しい指摘かどうか、この章で考察しておきたい。

二巻本色葉字類抄の同音字注付載項目に対応する和名類聚抄の同音字注とその所在を、［表3］をもとに［表5］として掲げた。和名類聚抄の見出し語数あるいはその選択状況から考えて、二巻本色葉字類抄における同音字注に対応するものが見出せるとは限らない。具体的な器物や動植物であれば、項目として掲げられている可能性はある。しかし、形状や動作に関わる項目を見出し語とはしにくい。和名類聚抄が百科辞典的な体裁を目指して編纂されたためと言える。そのような環境の中で、◎を付けた一三例が二巻本色葉字類抄の注字選択と同じ状況を示しており、加えて中古音的同音でもある。また、○を冠した一例〈30〉も中古音的同音ではあるが、同じ小韻内の別字をもって注字としている。類聚名義抄も同じ注字「鼠」を選択していること、小韻代表字である「暑」と小韻所属字「鼠」「黍」は相互に注字・被注字になり得ること、前章にて述べた。◎○両者合わせた一四例については類聚名義抄の注字選択とも一致する。これは、類聚名義抄の有力な出典として和名類聚抄が想定されていることから、当然の結果ではある。

和名類聚抄の出典には中国から移入された先行文献を多数見ることができるが、日本側で編纂されたと想定される文献も出典として参照している。出典を明示することで、その百科辞典的な体裁を整えようとする意図が汲み取れる。二巻本色葉字類抄に付けられた同音字注に対応する和名類聚抄の同音字注についても出典が明示されている。

鰊	音夷	崔禹錫食経	
斷	魚斤反	玉篇	
缶	音不	爾雅	
罘	音浮	唐韻・纂要	
田＋思	音思	唐韻	
童	徒紅反	禮記	
蝌	音科	唐韻	
蚪	音斗	唐韻	
鈇	音府	唐韻	
椽	音傳	兼名苑	
厩	救反	四聲字苑	
鯁	音耿	唐韻	
窻	七経反	文字集略	
鴛	音狂	爾雅	
炙	之夜反	唐韻	
紋	音文	考聲切韻	
黍	音鼠	本草	
廿＋奕	音軟	四聲字苑	
弢	撫	中央	

これら出典名の後に割り注で同音字注（あるいは反切注）と和訓が示される。唐韻による引用が七例、爾雅が二例、四聲字苑が二例、崔禹錫食経・玉篇・纂要・禮記・兼名苑・文字集略・本草・中央が各一例ずつの引用となっている。ここでも切韻系韻書の影響が大きいことは注目しておきたい。繰り返しになるが、和名類聚抄の編纂目的は和名による百科辞典的な体裁の整備にある。よって、直接か間接かまでは不明ながら、多様な文献を引用して、その目的を達成しようと努めたことが知られる。この和名類聚抄を先行文献に加えた類聚名義抄をもって、二巻本色葉字類抄の同音字注が付載されていれば、当然のごとく、和名類聚抄の同音字注を引用したように見える。

いままでの分析を総合すると、二巻本色葉字類抄の同音字注は、類聚名義抄を先行文献として引用し、字音把握に問題があると判断した場合、編纂者が切韻系韻書の影響を受けた別の先行文献を参看したと想定したい。類聚名義抄に該当する同音字注が存在しない場合にも、それは適用されたであろう。ただし、その注字選択において、日本漢字音の立場から、編纂者の字音知識が活用されたことも考慮しておくべきである。

【表5】

	被注字	注字	和名類聚抄		被注字	注字	和名類聚抄		被注字	注字	和名類聚抄
1	今	★金		14	衙	＊義注		27	允	★尹	
2	嗥	★豪		15	蝌	★科	◎科（一九24オ7）	28	炙	＊反切	之夜反（一六19ウ5）
3	鰒	◇夷	◎夷（一九8オ3）	16	蚪	★斗	◎斗（一九24オ7）	29	紋	★文	◎文（一二15オ8）
4	斷	銀	魚斤反（三6オ3）	17	鈇	◇扶	府（一二25オ6）	30	黍	★暑	○鼠（一七4ウ8）
5	誌	★志		18	蓬	逢		31	廾＋奕	★軟	◎軟（一七23オ6）
6	⺻＋离	★離		19	歟	★余		32	翬	☆輝	
7	廿	★入		20	椽	◆傳	◎傳（一〇10オ9）	33	弭	★撫	◎撫（一三13オ7）
8	矛	★謀		21	胰	◇夷		34	宿	★秀	
9	缶	◆不	◎不（一六7ウ6）	22	辜	★孤		35	宿	◇夙	
10	罘	★浮	◎浮（一〇13ウ2）	23	厩	★救	◎救（一〇7ウ2）	36	徽	☆輝	
11	罒＋思	★思	◎思（一〇13ウ2）	24	鯁	★耿	◎耿（一九10オ8）	37	屜	★燮	
12	稑	★六		25	窻	忿	七經反（一〇10オ7）	38	釐	◆亻＋來	
13	童	東	徒紅反（二8オ4）	26	鷲	★狂	◎狂（一八4ウ9）				

5　三巻本色葉字類抄への増補改訂

現存する色葉字類抄には二巻本と三巻本との両系統があること、すでに周知の事実である。二巻本から三巻本に至る増補改訂の過程で、どのように同音字注が継承あるいは改変や破棄などを経たか、この点を分析することで、色葉字類抄における同音字注の位置づけを明らかにしておこう。さらには、世俗字類抄（二巻本および七巻本）を含む字類抄諸本全体を俯瞰した同音字注の分析も必要である。これは別稿にする予定である。なお、三巻本は尊経閣文庫蔵前田家本（前田本と略称する）を分析の対象とするが、巻中と巻下の一部を欠くため、欠損する当該部分は黒川真三男氏蔵本（黒川本と略称する）を使用する。

三巻本色葉字類抄の同音字注については、すでに分析を試みた経緯[15]がある。ただし、前田本を対象として、黒川本は分析していないため、完全ではない。そこで前田本に欠落する部分を黒川本で補い、再度検証を試みた。その結果を［表6／1］［表6／2］として集約する。二巻本との対比ができるように［表1］も再編して加えた。三巻本では、巻上に六例、巻中に一六六例、巻下に一六四例、計三三六例を数える。義注の疑いが濃い巻上の一例（上・度・辞字六一オ6）[16]は除外した。すぐさま気づくことは、巻中や巻下に比べて、巻上の同音字注が極めて少ないことである。［表6／1］と［表6／2］とでは明らかに同音字注の分布数に違いがある。二巻本における同音字注の分布を注意深く見れば、その原因が氷解する。二巻本の巻上（上上・上下）に該当する三巻本は、巻上（伊部～與部）、巻中の他部から無部までに相当する。三巻本への増補改訂作業にあたって、その編纂者は二巻本巻上の同音字注を置換か破棄する方針で臨んだことがわかる。その経緯を理解しやすくするため、二巻本の同音字注に対応する三巻本の状況を［表7］にまとめた。いま述べた二巻本の巻上該当部分に存した同音字注は、〈01〉〈07〉二例を除いては、仮名音注に置換するか、または破棄されたのである。

同音字注による漢字音の把握にあたっては、中国語音の修練を要求するレベルが背景にあり、やはり容易なことではなかったと推測できる。日本語に馴化した仮名音注であれば、理解が容易になること、明らかであろう。少なくとも、二巻本の巻上相当部分について、三巻本の編纂者は仮名音注を中核に据えた漢字音の把握を目指したと考えられる。

ここで、例外とした二例も掲げておく。〈01〉が同音字注を残した理由は判然としない。仮名音注で言う「キン」「コン」二音を想定できるような配慮かもしれない。ただし、それは仮名音注でも可能である。同音字注でなければならない理由はない。〈07〉の場合、和訓「ハタチ」は理解が容易であろうが、音読み「ジフ」は定着しにくい。数詞ゆえ「ニジフ」と慣用的に読む危険があるためである。そこで、字音把握の簡潔明快な同音字注「入」を残したものと推察する。ただし、「ニフ」と理解することを排除はできない。なお、両例ともに中古音的同音の把握をしているので、◎を付して分類した。

今　イマ　音金　時　肆　此　已上同
（二巻本色葉字類抄／上上・伊・天象2オ3）
今　イマ　音金　時　同　肆　同　此　同
（三巻本色葉字類抄／上・伊・天象2ウ1）
廿　ハタチ　云入　為二十字
（二巻本色葉字類抄／上上・波・員数17オ5）
廿　ハタチ　云入　今直為二十字
（三巻本色葉字類抄／上・波・員数28オ7）

以上のように、二巻本の巻上相当部分においては、その同音字注を継承せず、三巻本独自の同音字注をも採用しない基本的な方針があったと推測

される。にもかかわらず、［表6／1］では三巻本の同音字注七例を数える。その中に、右の二例（二巻本の巻上相当部分に存する同音字注からの継承例）は含まれているが、三巻本独自の五例もある。

【表6／1】

二巻本色葉字類抄／巻上			三巻本色葉字類抄		
巻上上			巻上		
2	伊		1	伊	
0	呂		0	呂	
4	波		2	波	
0	仁		0	仁	
2	保		0	保	
2	邊		0	邊	
0	度		3	度	
0	池		0	池	
0	利		0	利	
0	奴		0	奴	
0	留		0	留	
0	遠		0	遠	
巻上下			巻中		
2	和		0	和	
6	加		0	加	
0	與		0	與	
1	他		1	他	
0	礼		0	礼	
1	曽		0	曽	
1	津		0	津	
0	祢		0	祢	
0	那		0	那	
0	良		0	良	
1	無		0	無	

【表6／2】

二巻本色葉字類抄／巻下			三巻本色葉字類抄		
巻下上			巻中		
0	宇		23	宇	
0	井		4	井	
1	乃		18	乃	
0	於		21	於	
2	久		38	久	
0	野		13	野	
1	満		27	万	
0	計		5	計	
0	布		16	布	
巻下下			巻下		
0	古		32	古	
0	江		8	江	
0	手		6	手	
1	阿		25	阿	
0	佐		8	佐	
3	木		7	木	
1	由		6	由	
0	女		1	女	
0	美		7	美	
4	師		23	師	
0	會		1	會	
1	飛		15	飛	
0	毛		13	毛	
0	世		6	世	
0	洲		6	洲	

【表7】

	被注字	注字	三巻本色葉字類抄
01	今	★金	◎金（上二ウ1）
02	嚊	★豪	カフ（上四ウ4）
03	鰒	◇夷	イ（上四ウ7）
04	斷	銀	カイ（上二四オ5）
05	誌	★志	シ（上二四オ8）
06	⿰礻＋离	★離	（上二六オ4）
07	廿	★入	◎入（上二八オ8）
08	矛	★謀	（上四四ウ3）
09	缶	◆不	フ（上四四ウ6）
10	罘	★浮	フ（上五〇オ2）
11	⿱四＋思	★思	シ（上五〇オ2）
12	稑	★六	ロク（上八六オ3）
13	童	東	トウ（上八六ウ3）
14	衙	＊義注	カ［平濁］（上九一ウ5）
15	蝌	★科	クワ（上九五オ1）
16	蚪	★斗	トウ（上九五オ1）
17	鈇	◇扶	（上九九オ1）
18	蓬	逢	（上九九ウ5）
19	歟	★余	ヨ（上一〇一ウ1）
20	椽	◆傳	（黒中一ウ3）
21	胰	◇夷	イ（黒中一六オ8）
22	辜	★孤	（黒中二二ウ3）
23	厩	★救	キウ（黒中四二オ4）
24	鯁	★耿	◎耿（黒中五九オ1）
25	窻	忿	忿（黒中七一ウ6）
26	鵞	★狂	◎狂（黒中七二ウ8）
27	允	★尹	◎尹（黒中九一オ3）
28	炙	＊反切注	シャ・之夜反（下三一オ5）
29	紋	★文	◎文（下三二オ1）
30	黍	★暑	◎暑（下五六オ2）
31	⿱廾＋奕	★軟	◎軟（下五六オ3）
32	翬	☆輝	◎輝（下五六ウ1）
33	弭	★撫	◎撫（下六七ウ4）
34	宿	★秀	◎秀（黒下六七ウ5）
35	宿	◇夙	◎夙（黒下六七ウ5）
36	徽	☆輝	◎輝（下七三ウ7）
37	屜	★燮	◎燮（下七四オ3）
38	釐	◆亻＋來	僖（下九四オ1）

母 ハハ 生母 母儀 母堂 嬢〔平・上濁〕同 阿嬢 ／ 上〔＊被注字の右側にあり〕
（三巻本色葉字類抄／上・波・人倫二三オ5）
戈＋鳥〔平〕トヒ 又戸＋鳥 ／ 云沿〔＊被注字の右側にあり〕 歹＋鳥 同
又作鵄 鵞 同 又クソトヒ 鵬 同
（三巻本色葉字類抄／上・度・動物五五オ7）
炷 トモス 炷火 ／ 云主〔＊被注字の右側にあり〕
（三巻本色葉字類抄／上・度・辞字六〇オ4）
駐 トヽム 佇 猪
（三巻本色葉字類抄／上・度・辞字六〇ウ3）
縦 南北耕也 タヽサマ 縦横 竪 同 袤 同 云茂 植 同
（三巻本色葉字類抄／中・他・方角六オ2）＊黒川本

被注字「母」「佇」に付けられた注字「上」「猪」には同音字注を示す「云（音）」表記がなく、編纂段階では存在しなかった可能性がある。書写を繰り返す過程で加筆されたものと見ておく。

類聚名義抄を参照すると、被注字「鳶」には「戈＋鳥」「戸＋鳥」という通用字体が確認できる。二巻本では、その通用字体「戈＋鳥」をも掲げて、これにも和訓「トビ」を付しており、掲出する第一字に和訓を付け、以下の同訓字は「同」と処理する原則（いわゆる同訓異字）から外れている。この混乱した状況を整理したのが三巻本の姿といえる。それでも、字音の把握が困難と判断したために、同音字注「云沿」を加えたと考えられる。

戈＋鳥 戸＋鳥 二通 トヒ 鳶 トヒ
（観智院本類聚名義抄／僧中一一八1）
戈＋鳥 トビ 鳶 トビ 戸＋鳥 歹＋鳥 鵄 鵞 鵬 已上同
（二巻本色葉字類抄／上・度・動物三一ウ1）

被注字「炷」は特に字音の把握が難しいとは言えない。同じ諧声符「主」を持ちながらも、字音が異なる「注」との混同を避ける配慮が働いたかもしれないが、三巻本で同音字注を加えた理由は不明である。

被注字「袤」の場合、諧声符読みさえも許さないような字で、その字音を把握するのは難しいという判断があったと推測する。ちなみに、類聚名義抄にも同じ同音字注がある。

袤 ナ茂 アカル〔平平濁〕
（観智院本類聚名義抄／法中一三九5）

二巻本の巻上相当に対して、同巻下（下上・下下）に存した同音字注は、誤写あるいは誤認の可能性がある〈38〉以外、すべて三巻本に継承されている。二巻本の巻下に該当する三巻本は、巻中の後半である宇部から布部までと、巻下（古部〜洲部）である。二巻本から三巻本への増補改訂に際して、編纂者の音注に関わる方針が大きく変更となったのだろうか、その増補数は著しい。すでに公にした所(17)であるが、反切注も同じような状況を分析できるのである。この章をまとめておく。

〔二巻本色葉字類抄の巻上〕〔三巻本の巻上と巻中（他部〜無部）〕
同音字注二二例 ↓ 仮名音注に置換、または破棄。
〔二巻本色葉字類抄の巻下〕〔三巻本の巻下と巻中（宇部〜布部）〕
同音字注一四例 ↓ 継承と大幅な増補による三二九例。

6 おわりに

以上を要するに、二巻本色葉字類抄に付載された同音字注は次のような特徴を持っていると認められる。

（A）選択した同音字注は切韻系韻書と一致する確率が相当高く、小韻代表字をもって、注字とする傾向にある。

（B）切韻系韻書そのものを引用したわけではなく、その影響を受けた先行文献から引用した可能性があるが、特定はできない。

（C）現存する先行文献としては、類聚名義抄が候補になる。

（D）三巻本への増補改訂に際して、分布状態に偏りがある。これは反切注と同じ傾向を示す。

［注］

（1）尊経閣善本影印集成19「色葉字類抄 二・二巻本」（八木書店、二〇〇〇年）を用いた。なお、「同音字注」という述語は小松英雄氏の説による。「類音」「直音注」と称する場合もある。小松英雄「平安末期における漢音の一断面」（国語と国文学、四七巻一〇号、一九七〇年）

（2）二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄音注攷（I）―同音字注の考察―」（国語研究／國學院大學、四二号、四五～五九頁、一九七九年）

（3）現存する字類抄諸本（世俗字類抄や色葉字類抄などを包括した名称）をも示す。

【原形本】

［イ］川瀬一馬蔵本

▼鎌倉時代初期の書写になると推定する零本。原形本と認定できるかは不明。

【節用文字】

［ロ］お茶の水図書館蔵本（成簀堂文庫旧蔵）

▼二巻本色葉字類抄を平安時代末期か鎌倉時代初期に書写したともいわれる零本。

【二巻本世俗字類抄】

［ハ］天理図書館蔵本（松平定信旧蔵）

▼江戸時代中期以降の書写か。

［ニ］黒川家蔵本

▼元治元年晩夏中旬に黒川春村が書写。

［ホ］川瀬一馬博士蔵本

▼黒川家蔵本［ニ］の手写本。

［ヘ］東京大学文学部国語研究室蔵本

▼奥書のない黒川家旧蔵本であり、黒川家蔵本［ニ］とは別の一本。

【七巻本世俗字類抄】

［ト］尊経閣文庫蔵本

▼巻三を欠く六冊本。その他、永正十二年の書写になる三巻本が水戸彰考館にあったが、戦災で消失したという。

【二巻本色葉字類抄】

［チ］尊経閣文庫蔵本

▼正和四年と応永三十年との二度に渡る伝写を経て、永禄八年に書写。

【三巻本色葉字類抄】

［リ］尊経閣文庫蔵本

▼院政期末あるいは鎌倉初期の書写ともいうが、確かではない。中巻と下巻の一部を欠く。欠落部分については黒川家蔵本の［ヌ］にて補う。

［ヌ］黒川家蔵本

▼江戸中期の書写か。

（4）二巻本色葉字類抄の奥書を参看すれば、二巻本の「色葉和名」をもとにして、四巻構成の「橘先生之本」は校訂されたようである。この『二巻本色葉和名』自体が原形本に該当するのか、あるいは改訂を経た「橘先生之本」を原形本に見立てるべきなのか、判然としない。該当箇所を掲げる。

○傳二借橘先生之本一、彼人於二本色葉和名一更加二功労一加二文字一、正声無レ極勝本也、…（巻上上・四九オ二～三）

○自二天養比一至二于長寛一廿余年、補綴无レ隙、抑部類如レ舊更加二星點一、紕繆雖レ多愚昧難レ直、學者毎レ見、可二摺改一之、誂貢士入道詞字少々加二朱點一、為レ要二文不迷一也、傳二借橘先生之本一、為二書本一而已、…根本書者、上下両巻也、橘先生本開為二四帖一、今又開為二八帖一而已、…（巻上下・五三ウ五～七）

（5）陸方言が編纂した原本「切韻」から宋代の「広韻」に至る一群の韻書を指す。以下の複製本を参看した。また、切韻系韻書の略記号は「十韵彙編」に準じた。

・陳彭年等編「校正宋本廣韻」藝文印書館、一九七四年）

・劉復等編「十韵彙編」（台湾学生書局、一九七三年）

・龍宇純「唐写全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋」（香港中文大学、一九六八年）

（6）いわゆるJIS外漢字表示方法については、以下の論文に准拠した。部首や諧声符など、漢字の字形パーツを組み合わせた方法である。当該の漢字には傍線を付してある。

・二戸麻砂彦「パソコンにおける漢字処理／試論」（山梨県立女子短期大学紀要28、九～一八頁、一九九五年）

（7）中古音については三根谷説によった。
・三根谷徹「中古音の韻母の体系――切韻の性格――」（言語研究、三一号、一九五六年）
・三根谷徹「越南漢字音の研究」（東洋文庫、一九七二年）
・三根谷徹「唐代の標準音について」（東洋学報、五七巻一・二号、一九七六年）
・三根谷徹「中古漢語と越南漢字音の研究」（汲古書院、一九九二年）

（8）音韻論的解釈に基づく三根谷説の推定音。

（9）一般的に、中国語の音節構造は IMVF/T で示される。等韻学の述語である声母・韻母との関係も加えておく。

I	initial	頭子音	↑声母
M	medial	介音	↑韻母
V	principal vowel	主母音	↑韻母
F	final	末子音	↑韻母
T	tone	声調	↑韻母

（10）声母・韻母、あるいは見・溪・群・疑母など三十六字母は中国語音韻学における伝統的な術語群。内容の不明なものもあり、留意しながら使用することが期待される。

（11）全濁音の無声化は、七世紀半ばに摩擦音である匣母や禅母から始まり、閉鎖音や破擦音（b・d・gなどの頭子音）にも及ぶ。日本漢字音においては、全濁音を清音で受容した、いわゆる漢音に影響が見られる。「日本書紀」（七七二年）の字音仮名が代表である。

（12）次の複製を参照した。
・正宗敦夫編「類聚名義抄第一・二巻」（風間書房、一九七五年）
・天理図書館善本叢書「類聚名義抄観智院本」（和書之部32～34、八木書店、一九七七年）
・宮内庁書陵部蔵「図書寮本類聚名義抄」本文編・解説索引編（勉誠社、一九七六年）

（13）次の複製を参照した。
・諸本集成「倭名類聚抄」本文篇・索引篇（臨川書店、一九七一年）
・東京大学国語研究室資料叢書13「倭名類聚抄京本」（汲古書院、一九八五年）

（14）次の書籍の研究編（1134～1217頁）に詳しい。その結論は1214頁に集約されている。
・三宅ちぐさ「天理大学付属天理図書館蔵　世俗字類抄　影印ならびに研究・索引」翰林書房、一九九八年）

（15）注（2）を参照。

（16）辞字門に掲出される「調　トトノフ」の同訓異字「巾　仕」の注である。同音字注としては音が一致しない。二巻本でも「巾　仕」とあり、同音字注であることを示す「云（音）」表記が付されていないことからも、義注とするのが妥当である。

（17）反切注に関しては次の諸論文を参照。
・二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄反切音注攷（Ⅱ）―反切音注の考察（上）―」（山梨県立女子短期大学紀要19、一～九頁、一九八一年）
・二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄反切音注攷（Ⅱ）―反切音注の考察（下）―」（山梨県立女子短期大学紀要20、一～一九頁、一九八二年）
・二戸麻砂彦「字類抄諸本の改編と反切音注」（國學院雑誌、一〇二巻第一一号、二〇〇一年）